

エコツーリズムにおける地域環境保全の役割

—沖縄県・石垣島における WWF しらほサンゴ村体験ツアーを事例として—

市田 飛鳥***, 林 浩二***, 細谷 夏実*

要 約

日本におけるエコツーリズムと地域の環境保全の接点について考察した。

エコツーリズムとは、地域固有の自然及び地域資源を観光資源とした観光形態であり、地域の経済及び社会に有益であり、さらに、何らかの手立てによって地域資源の保護・保全にも貢献することが期待できるものであると定義できる。そして、エコツーリズムに関わる主体に注目し、主体間において「自然」について共通理解することが、エコツーリズムが環境保全に貢献する旅行形態となるために必要な条件だと考えた。

このことは、エコツーリズムの事例として取り上げた第4回 WWF しらほサンゴ村体験ツアーの検討からも支持された。「よそ者」であるサンゴ村と地域住民との間の地域の自然環境についての共通理解が重要な要素であることが示された。

序章

昨今、「エコツアー」という言葉が、大手旅行代理店主催のツアーのパンフレットや、メディアなどで取り上げられるようになってきた。その際、エコツアーと呼ばれているのは、(1)バードウォッチング・ホエールウォッチング・フラワートレッキングなどを盛り込んだ自然観察旅行、(2)国立公園やナショナルトラストなどの自然保護の先進地を見学したり環境会議等に参加する研修旅行、(3)修学旅行先でゴミ拾いなどの環境保全活動をする環境学習旅行、(4)ユネスコの世界遺産基金や自然保護団体などに対する寄付を盛り込んだ寄

付金つき旅行、など、さまざまな形態の旅行である(吉田, 1999)。

そもそもエコツーリズム(エコツアー)は、「自然保護のための経済手段を導入しようとする考え方—保護地域への観光が、さまざまな雇用機会を提供し、地方と国の双方に収入をもたらすことのできる選択肢のひとつであり、保護地域を保護する上で可能性をもった手法という見解—と自然志向の旅行者ニーズの増加に対応しようとする観光産業分野の要求が1980年代後半に結びついて発展してきた」(菊池, 1999, p.137)とされている。また、観光産業が世界経済において成長していく中で、従来のマスツーリズム(大衆観光)に

*大妻女子大学 社会情報学部

**現在：伊勢丹

***千葉県立中央博物館

よる自然環境の破壊に対し批判が高まり、持続可能な観光形態の模索の結果エコツーリズムが発展したとの見解もあり(真板, 2001), エコツーリズムを従来のマスツーリズムに対し「オルタナティブ (=代替)」であるとしてオルタナティブ・ツーリズムと称する場合や、「持続可能性」を志向するとしてサスティナブル・ツーリズムと称する場合もある。

エコツーリズムの特徴について、カロリン(2002, p.6)は、「Fennellは1987年から1996年までの10年間の間に出された定義をとりあげ、そこに含まれている原則をもとに分析した。これらの定義には、自然への関心、保護に貢献すること、なにかの形で自然保護地域の指定を受けている地域を対象にしていること、地元住民の利益になること、教育的な価値のような原則がほとんど含まれている」としている。これによると、エコツーリズムにおける「自然」は「自然保護地域」を指し、エコツーリズムと環境保全の接点は「保護に貢献する」ことにあることとなる。実際、1982年に国際自然保護連合(IUCN)が開催した第3回世界国立公園保護地域会議では、エコツーリズムは自然保護債務スワップとともに、自然保護地域の資金調達機構として重要であるとされている(吉田, 1999)。また、日本においても1990年に、当時の環境庁自然保護局が、アジアの熱帯雨林保護地域での熱帯林の保護にエコツーリズムが一翼を担うとの見解を出している(瀬田, 1995)。

このようにエコツーリズムの理論における「自然」は、往々にして「自然保護地域」を指す。しかし、日本のように自然環境と人間の生活環境が欧米に比べ比較的近い場所、または自然保護地域などを設けにくい地域に導入する場合には、「自然」は「自然保護地域」だけとは限らないであろう。また、エコツーリズムの推進による入り込み人数の増加に伴い、自然環境の悪化及び住民の生活環境への悪影響も懸念される。

本論文においてはこのような点に着目し、エコツーリズムと地域の環境保全の接点について考え、日本においてエコツーリズムが自然環境に及

ぼす影響を最小限に抑えつつ推進されるための社会的条件を模索する。

そのために、1章ではまず、今までに提唱されているエコツーリズムのさまざまな定義を整理する。続いて2章で、沖縄県石垣島のWWFサンゴ礁保護研究センターしらほサンゴ村が主催している「しらほサンゴ村体験ツアー」を取り上げ、地域固有の自然環境を活かしたこのツアーを通して、環境保全とエコツーリズムの接点を探る。3章では、サンゴ村のツアーを囲む環境について述べ、時間をかけて築かれた地元の人々との関係をベースにした活動がいかにしてエコツーリズムに活かされているかを検討する。そしてこの事例を踏まえた上で、地域住民と研究者の交流を通して自然環境についての共通理解が得られていることを手掛かりとしながら、エコツーリズム推進の社会的条件について再検討を加える。

なお、沖縄県におけるエコツーリズム研究については、県(観光リゾート局観光振興課・文化環境部自然保護課)によるガイドラインの公表をもって期を画すことができよう。本研究はガイドライン策定中(2002年度~2003年度)に行われたものであり、公表(2004年9月)直前の状況における調査・分析であることをはじめにお断りしておく。なお、政府も2003年11月にエコツーリズム推進会議を設置し、2004年6月に「5つの推進方策」を定めている。

1. エコツーリズムの概要

1-1. エコツーリズムの定義

エコツーリズムの定義は、定義を論じる論者あるいは機関の立場やスタンスによって多様であり、統一された定義はまだ確立していない。ここでは、本研究実施の時点までに提唱されているエコツーリズムの主な定義を、規範(理念)的なもの(こうあるべきという立場から考えられたもの)と実態的なもの(実際に行われている実態を踏まえて提唱されたもの)とに分類することを試み、表1にまとめた。

表1 エコツーリズムの定義

| ＜規範（理念）的定義＞ |
|---|
| <p>・第1回東アジア国立公園保護地域会議（1993） 「環境に配慮した旅行または旅行者が生態系や地域文化に対する著しい悪影響を及ぼすことなく自然および文化地域を訪れ、理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう施設および環境教育を提供すること」</p> |
| <p>・エコツーリズム推進協議会（日本）（1999） 「エコツーリズムとは、(1)自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること、(2)観光によってそれらの資源が損なわれることがないように、適切な管理に基づく保護・保全をはかること、(3)地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果を実現することをねらいとする、資源の保護+観光業の成立+地域振興の融合を目指す観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする。」</p> |
| <p>・財団法人日本自然保護協会（1994） 「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行」</p> |
| <p>・真板（2001） 「エコツーリズムは、以下の3つが相補し循環する目的の上に成り立つ観光システム概念である。(1)自然環境の保護、管理の運営を通じそれらの資源が持続的に、かつ適切に利用できるよう、資源を保全していくこと、(2)地域社会の活性化と地域産業を育成すること、(3)(1)、(2)を成立させるために、地域固有の資源をいかした観光手段を導入し、産業として成り立たせること」</p> |
| ＜実態的定義＞ |
| <p>・WTO and UNEP（2001） 「(1)自然と伝統文化の観察や評価を主な動機にした、自然資源をもとに行われる観光。(2)教育的・解釈的な面を有する。(3)主に少人数のグループを対象に、専門的で、地元資本をもとに成り立っている中小業者により行われる。(4)自然や社会・文化的環境への影響を最低限に抑える。(5)地元コミュニティや自然保護に関わっている団体に経済的な利益をもたらす、地元雇用口を提供し、観光客や地元の自然・文化資源に対する意識を高めることにより、自然地域の保護を支援する。」</p> |
| <p>・Boo（1991） 「エコ・ツーリズムとは、(1)保護地域のための資金を生み出し、(2)地域社会の雇用機会を創出し、(3)環境教育を提供することによって、自然保護に貢献するような自然志向型の観光（ツーリズム）である」</p> |
| <p>・社団法人日本旅行業協会 「次の要素が一つでも入っている自然観察主体のツアーで、環境への悪影響を最小限に抑える努力が示され、訪問先に経済的・社会的な貢献があれば、そのツアーをエコツアーと呼ぶこととした。 (1)旅行者の教育、(2)絶滅に瀕した動植物の保護、(3)文化・歴史的環境保全への貢献、(4)専門ガイドの利用、(5)地元社会の利益、(6)ゴミの削減と最小限のインパクト」</p> |
| <p>・菊池（1999） 「エコ・ツーリズムとは、環境問題が重要な社会問題と認識される現代社会において、自然を中心とした環境を主な対象とし、自然保護、環境問題への志向性をもった観光が生み出した諸々の社会現象」</p> |
| <p>・敷田・森重（2001） 「自然環境への負荷を最小限にしながらそれを体験し、観光の目的地である地元にたいして何らかの利益や貢献のある観光」</p> |
| <p>・島川（2001） 「ただ単に『自然環境を素材に』した観光形態のことを指す」</p> |
| <p>・石森（2002） 「(1)地域資源の維持・管理、(2)地域住民の参加、(3)地域活性化や経済波及効果の創出、という3つの異なる要素から成り立っている」</p> |
| <p>・山極（2003） 「比較的攪乱されていない自然地域をベースとした観光の一部で、その場所を劣化させることなく、生態学的にも持続可能なもの」</p> |

いずれの立場から眺めた場合でも、「エコツーリズム」とは観光形態や社会現象、観光システム概念などとされている。本論文では「ツーリズム」の直訳 (tourism = 「観光、観光事業」) も踏まえ、エコツーリズムを観光形態の一種として考えることとする。また、エコツアーとは、エコツーリズムの考え方に基づくツアーを指す。

エコツーリズムにおいて資源である「自然」は、定義する立場・論考の相違から、「保護地域」「自然資源」「生態系」「地域の自然」「自然環境」「自然地域」といったように表現に幅がある。また定義によっては、「自然」とともにその地域の「文化」も含めたものを「地域資源」としているものがあるが、これは「自然」が「文化」と一体となっている地域があるからであろう。これらのことから、エコツーリズムにおける資源は、地域固有の「自然」であり、さらに地域によっては「自然」とともに「文化」を含めた「地域資源」とする場合もあると考えられる。

また、表1をみると、「地域社会(または地域、

地元)」という言葉も「自然」と同様多くの定義に盛り込まれており、エコツーリズムは「地域」の経済(雇用機会創出・産業の育成)、社会(振興・活性化)に貢献するとされている。

さらに、エコツーリズムは「自然」及び「地域資源」の「保護(保全)」にも貢献すると考えられている。

以上のことを踏まえ、本論文では、エコツーリズムとは「地域固有の自然及び地域資源を観光資源とした観光形態であり、地域の経済及び社会に有益であり、さらに、何らかの手立てによって地域資源の保護・保全にも貢献することが期待できるもの」とする。

1-2. エコツーリズムにおける主体

エコツーリズムに関わる主体は、旅行者・旅行者・地域住民・研究者・行政の5つとされている(エコツーリズム推進協議会, 1999)。本節では、エコツーリズムにおけるそれぞれの主体の特徴を、様々な視点から整理し、比較した(表2)。

表2 様々な観点における主体の比較

| | マス ツーリズム | エコ ツーリズム | 「自然」の 捉え方 | サンゴ村体験 ツアーの場合 |
|---------|-------------|---|------------------------------------|--|
| 1. 旅行者 | 娯楽として楽しむ | ツアーの選択を通してよいエコツーリズムの推進者になり得る | 漠然としたイメージで捉えている | WWFの活動を支援している人 |
| 2. 旅行者 | 利益を追求 | 旅行全般に関わるため、エコツーリズムが自然保護に貢献することに対し影響力を持つ | 経済的利益を生む資源であるが、破壊したら別の場所に移動することも可能 | WWFのスタッフプログラムを作り、ガイドも努める |
| 3. 地域住民 | 生活の安定・向上を追求 | エコツーリズムにおいて重要な主体であり、普段から自然資源を利用している | 身近なものであり、特別な価値は見出していない | 宿泊施設・シュノーケリングのボートを提供する 豆腐作りの講師をし、懇親会で参加者をもてなす |
| 4. 研究者 | | 保護の重要性を立証できる科学的データの構築 | 学術的価値・研究上の価値がある | WWFのスタッフ 自然解説をする |
| 5. 行政 | 経済活性と税収 | エコツーリズム開発を成功に導くような政策や組み立てを適正に設定する | | 今回、沖縄県及び石垣市は関わっていない |

まず、マスツーリズムとエコツーリズムという大きな二つの観光形態に関して、主体の果たす役割を比較した。マスツーリズムにおいては、旅行者は旅行を娯楽として捉え、一方、旅行業者は商品である旅行を売り、利益を上げることを主な目的としていると考えられる。地域住民にとってはツアーによって地元にもたらされる経済的な恩恵による生活の安定や向上が期待できるであろう。そして、行政は、産業振興の一環として観光産業推進のバックアップをする。

一方、エコツーリズムにおける主体の特徴については、Boo (1991) を参考に検討した。前述したように、Boo のエコツーリズムの定義における自然は、「保護地域」を指している。したがって、以下の主体の特徴は、エコツーリズムを保護地域で行い成功した場合に想定される特徴である。まず、旅行者はツアーを選ぶ権利を持っているため、旅行者が選択したツーリズムが発展していくことになる。一方、旅行業者はツアーを計画・販売するので、ツアー全般に影響力を持っていると考えられ、自然観光への配慮を心掛けることが求められる。また、地域住民は普段の生活の中で自然環境を利用しており、地域住民の自然環境の利用についての意見は尊重されるべきであろう。そして、研究者は環境を保護することの重要性を立証できる科学的データを構築することが期待されるであろう。最後に行政は、他の主体四者のバックアップをし、エコツーリズムを成功へと導くような政策を提言していくことなどが期待される。

1-3. エコツーリズムが環境保全に貢献するには

ここでさらに、エコツーリズムの持つ強み・弱みをまとめ、その上でエコツーリズムを環境保全に役立てる条件について考えたい。

1-3-1. エコツーリズムの強み・弱み

エコツーリズムの持つ強みとして、まず環境保全への貢献が挙げられる。例えば、ツアーの利益の一部を自然保護の資金にしたり、資源となる自然環境を適切に管理し維持していくことが環境保

全への貢献になるであろう。また、人々の自然及び環境への関心が高まり観光商品としてニーズが出ることから、観光産業振興につながると考えられる。さらにエコツーリズムを推進する地域において、雇用創出・拡大などの経済活性化、地域社会の活性化も期待できるだろう。

しかし、エコツーリズムの弱みとして、あくまでも観光の一形態であることから自然環境への負荷が懸念されることが挙げられる。なぜなら、自然環境に人がはいるこむことで、自然環境に対し何らかのインパクトを与えることが考えられるからである。

よって、エコツーリズムと称したツアーであっても、必ずしも環境保全に貢献できるとは限らない。そこで、エコツーリズムが環境保全に貢献する旅行形態であるための条件を検討してみたい。

1-3-2. エコツーリズムにおける主体間の共通理解

前述したようにエコツーリズムには5つの主体が関わっている。エコツーリズムが環境保全に役立つものであるかは、これらエコツーリズムにおける5つの主体の自然環境への対応によって決まるだろう。なぜなら、表2にまとめたように、エコツーリズムはマスツーリズムのように個々の主体が自らの利益を追求するだけでは成り立たないと考えられるからである。

そこで、エコツーリズムにおける5つの主体それぞれが、「自然」をどのように捉えているのか想定される例を表2にまとめた。まず、旅行を選ぶという権利を行使できる旅行者が「自然」に対し抱いているのは漠然としたイメージかもしれない。しかし、敢えてエコツーリズムに参加しようという意識がある旅行者であれば、自然や環境の保全に関しても肯定的・協力的な意識を持っていると考えられる。一方、旅行業者は環境保全に役立てるよう旅行を計画できる立場にあるが、彼らにとっては「自然」は当面経済的利益を得られる資源である。自然環境の悪化を無視しないとしても、やむを得ず環境の悪化が生じてしまった場合には、コストをかけて悪化をくい止める手だてを

とるよりは、経済的資源である「自然」を持つ新たな地域を求めていくことも想定される。さらに、普段から自然を利用し「自然」に近い場所で暮らしている地域住民は、身近にある「自然」に対し、身近でありすぎる故に特別な価値を感じてはいないかもしれない。これらはかなり極端な例だが、エコツーリズムを推進するにあたって核となる旅行者・旅行者・地域住民の三者が、「自然」に対して共通の認識・捉え方をすることは難しいことが容易に想像できる。これら三者にさらに研究者・行政を加えた五者を考えると、5主体が連携してエコツーリズムを通じて自然環境保全に貢献するということが実現するのは困難が予想される。

以上のことを踏まえ、エコツーリズムが環境保全に貢献する観光形態であるための条件として欠かせない要素のひとつとして、エコツーリズムに関わる主体間において、観光の対象となる「自然」についての共通理解を築きあげることが指摘したい。なお、共通理解を進めるにあたっては地域住民の理解が他よりも優先されることが理想であろう。なぜなら、長期的な目で見て自然環境の変化により一番影響を受けるのは地域住民だと考えるからである。

この共通理解を通して、自然環境についての知識や情報を広め、深め、主体間で意見を交換しながら、地域にとってよりよい自然環境のあり方を模索すること、それが、エコツーリズムが環境保全に貢献できる旅行形態となるための必須条件であると考えられる。

次の章からは、沖縄県石垣島における地域の自然を活かしたツアーの事例をもとに、地域の環境保全とエコツーリズムの接点を検討してみたい。

2. エコツーリズムと地域社会：WWF サンゴ礁保護研究センターしらほサンゴ村の事例より

本章では、エコツーリズムがどのように地域の環境保全に貢献できるのかについて、「第4回 WWF しらほサンゴ村体験ツアー」のツアーを取

り上げ、ツアー実施（2003年10月11日から10月14日にかけての3泊4日）後である2003年10月22日から10月25日にかけて石垣島において実施したインタビュー調査の結果から検討を行った。調査では、(財)自然保護基金ジャパン（以下「WWF」と表す）サンゴ礁保護研究センターしらほサンゴ村（以下「サンゴ村」と表す）の小林孝氏と、石垣島エコツアー連絡会¹⁾世話役の谷崎樹生氏にインタビューを行った。両氏とも県外から石垣島に移住し、現地で自然保護に関わる活動を幅広く行っている。

白保の海には北半球で最大最古のアオサンゴ群落が広がっており、WWFが白保の集落にある「サンゴ村」を拠点に、その保護活動をしている。

2-1. 事例：「第4回 WWF しらほサンゴ村体験ツアー」の概要

このツアーは、WWFが毎年1回秋に行っているWWF会員向けのツアーである。WWF作成のパンフレット（2003年）によると、このツアーは「白保の自然の素晴らしさと、その保全の現場を皆さんの目で、肌で、直接感じていただくことを第一の目的」としたものである。

このツアーの定員は15名だが、今回は14名が参加した。

今回の「WWFしらほサンゴ村体験ツアー」（以下、「サンゴ村体験ツアー」と表す）のプログラムの概要は、以下の通りである。

- 1日目：石垣空港に集合後²⁾、白保に到着
 <午後>シュノーケリングの練習
 <夜>夜の観察会
- 2日目：<午前>シュノーケリングでサンゴ礁を観察
 <午後>サンゴ村の「白保の今昔展」見学
 白保集落散策
 <夜>村民のつどい³⁾
- 3日目：<午前>「WWF自然保護のつどい」⁴⁾
 <午後>豆腐作り教室⁵⁾
 <夜>懇親会⁶⁾

4日目：＜午前＞解散式

島内バスツアー(オプション)

白保を出発し、石垣空港にて解散。

2-2. エコツアーとしての「WWF しらほサンゴ村体験ツアー」の検討

1-1で述べたように、本論文では、エコツーリズムとは「地域固有の自然及び地域資源を観光資源とした観光形態であり、地域の経済及び社会に有益であり、さらに、何らかの手立てによって地域資源の保護・保全にも貢献することが期待できるもの」と定義した。

この定義は、2004年9月に沖縄県が出したエコツーリズムのガイドライン(沖縄県, 2004)に示された「1. 自然・文化・歴史の適切な保全と持続的な活用 2. 地域の活性化 3. 訪問者が適切な案内を受けて地域の自然・歴史・文化とふれあう活動」という3つの要素をみたく観光の考え方」という定義とも大筋で一致している。

今回事例として取り上げた「サンゴ村体験ツアー」は、地域固有の自然及び地域資源であるサンゴ礁を観光資源とした観光形態であり、プログラムの内容には上記の定義に規定された要素を含んでおり、エコツアーとして捉えてよいと考えられた。以下、「サンゴ村体験ツアー」の内容を詳しく検討しながら、エコツアーが備えるべき要素について考えていきたい。

2-2-1. 「サンゴ村体験ツアー」の趣旨

WWFは自らの活動の中で、このツアーを「村民」(サンゴ村の活動を支援している人たち)への活動の報告であり、サービスだと位置づけている。そのため、サンゴ村の村民が優先的にツアーに参加できる。また開催回数は、保護活動の傍らの活動ということで年に一度に限られる。いずれにせよ、収益を目的としているわけではない。

2-2-2. 「サンゴ村体験ツアー」にみられるエコツアーとしての要素

まず、「サンゴ村体験ツアー」の特徴として、ツアー参加者が自然を学ぶ機会が設けられている

ことが挙げられる。例えば、「夜の観察会」でのサンゴ村スタッフによる解説や「自然保護のつどい」での講演がそれに当たる。さらに自然保護の専門家であるサンゴ村スタッフがプログラムを監修していることから、これらは参加者に対する環境教育にあたることも考えられる。また、懇親会などという形で地元の人々との交流の場も設けられている。

このようなプログラムが、直接的に地域資源の保護・保全に貢献しているかについては、明確な結果はわからない。しかし、ツアー参加者がこのツアーを通じて自然への知識を深めたり、サンゴ礁保護及び白保地域への理解・興味が促進されたりすることが期待できるのではないだろうか。なお、調査前に筆者らは、地元住民にとってもツアー参加者との交流が刺激になり、日常生活や考えに何らかの変化があるかもしれないと考えていたが、今回の主催者側への聞き取り調査では確認できなかった。しかし、地域社会への影響は特になんともいっても、地域の自然であるサンゴ礁を観光資源とし、ツアー参加者の自然保護及び地域文化への理解促進を通じて、地域の資源の保護・保全に貢献していることは確かであろう。

2-3. 「サンゴ村体験ツアー」におけるエコツーリズムの主体の検討

本節では、「サンゴ村体験ツアー」をエコツーリズムの観点から再度見てみる。すなわち、1章で述べたエコツーリズムにおける主体を、「サンゴ村体験ツアー」の場合にあてはめて考えてみたい。

今回の「サンゴ村体験ツアー」に携わっているのは、以下のような人々である：サンゴ村のスタッフ・WWF東京事務局のスタッフ、石垣島の他のNGOのメンバー、地元住民、「自然保護の集い」の発表者、ツアー参加者、民宿。これらの人々についてツアーでの役割を検討する。

1章で述べたエコツーリズムの主体のうち、旅行者はツアー参加者にあたる。ツアー参加者は日頃からWWFの活動を支援している人々である。したがって、環境保全への関心は高いことが

予想される。また、旅行業者に相当するツアーの企画者・ガイドにはサンゴ村スタッフ・東京事務局スタッフが該当する。このツアーには、外部の旅行業者は関わっていない。WWF スタッフは、ツアー参加者に対してサンゴ村を含む白保を「体験」してもらおう助け、例えば生物の説明や白保についての説明などを行う。石垣島の他の NGO のメンバーとは、普段のサンゴ村の活動において観察会などを手伝っている人々で、ツアーでもサンゴ村スタッフを手伝っている。したがって、WWF のスタッフの役割におおかた準ずると捉えられる（石垣島の NGO については、3-2 で述べる）。地元住民とは、民宿の経営者・従業員と、ツアーを通してツアー参加者と接触のあった白保住民が該当する。また、研究者の役割に該当するのは「自然保護のつどい」（ツアー3日目）の発表者と WWF スタッフと言えらる。

以上をまとめ、表2に加えた。

このように、「サンゴ村体験ツアー」では、1章で述べたエコツーリズムの5つの主体、またはそれに該当すると思われるもののうち、「行政」以外が揃っており、それぞれの主体が担う役割もエコツーリズムが求めるものと対応していると考えられた。個別のツアーに行政が関与する必然性は少なく、今回もそうであった。

さらに、このツアーがエコツーリズムの理念に沿ったものであることを、ツアーの特性からも示したい。開催回数が年に1回でありツアー参加者の数も少人数で設定されていることから、エコツーリズムの特性である、環境の負荷を抑えることで自然の保護・保全に反しないという点を満たしていると言えるであろう。さらに、地域の経済に有益かどうかについては、白保集落内の民宿を利用するなどしている点で多少とも貢献できていると考えられる。また、このツアーの開催により、ツアー参加者が再び白保を訪れたり、参加者が白保を人に紹介したりした結果観光客が増えるといったように、将来的に地域の観光収入の増加につながることも期待できよう。

年に1回の開催ということや、サンゴ村が収益を目的としてツアーを行っていないということか

ら、「サンゴ村体験ツアー」は、あくまで特殊な例として認識するべきであると考えが、このツアーはエコツーリズムの要素を満たしているように見える。そこで3章では、「サンゴ村体験ツアー」が開催されるに至った背景と今後の展望について詳しく検討したい。

3. WWF サンゴ礁保護研究センターしらほサンゴ村と石垣島のエコツーリズムの展望

2章で事例として取り上げた「サンゴ村体験ツアー」の検討から、その主催団体であるサンゴ村は、エコツアーの要素を含んだツアーを提供していることが明らかになった。そこで3章では、なぜこのようなツアーを開催するようになったのか、今のような形にできたのかを探っていく。

3-1. WWF サンゴ礁保護研究センターしらほサンゴ村の地道な活動

3-1-1. 住民とのつながり

白保に WWF サンゴ保護研究センターの準備室（正式にサンゴ村がオープンするまでの仮事務所）ができたのは、1995年のことである。それから5年後の2000年4月に、「しらほサンゴ村」はオープンした。オープンしてから活動が軌道に乗るまでは様々な困難があったという。中でも大きかったのは、地元住民とのかわりであった。その点で、準備室の白保集落への溶け込みがとても大きな意味を持っていたと考えられる。このことについて、小林氏の手記（1998）を以下に引用する。

「白保の人々には『自分たちが（新空港反対闘争を通じて）守ってきた白保の海を、あのエジンバラ公（白保を訪問し地元を勇気づけた）が代表を務める WWF が引き続き協力して守ってくれる』という認識があり、センター建設には当然ながら賛成多数だった。しかし、WWF とは何か十分に理解される状況ではなかったはずだし、白保の海の保護を訴えながら集落に入ろうとしてい

る『よそから来た組織』を斜めに見ている人々もいなかったわけではない。

そういった人々にWWFの活動を理解してもらうためには、時間をかけてゆっくりと、実績を示しながら活動する、というのが最良の方法だ。

(中略)そこで準備室は村の行事(例えばハーリー祭、豊年祭など)に積極的に参加し、また小学校の『海の体験学習』では海の先生役をさせてもらったりなど、さまざまな活動を通じて、地域住民への溶け込みを進めてきた。

その結果最近では、白保のサンゴ礁センターを建設する意味が、白保集落内でしっかりと納得された手応えを感じるに至った。しかし、それが完全であるとはまだいえない。今後は継続してあらゆる活動をしていくのが課題といえる。」(小林, 1998, pp. 5-6)

3-1-2. 啓発活動

サンゴ村では、前述したように地元とのつながりを築くことに力を注いでいる。なぜなら、「地元を守る主役は地元の人であるべきで、WWFはそのお手伝いをしている」とサンゴ村のスタッフは考えているからである。そのことが最も顕著に現れているのが、啓発活動である。

まずエコツアーに関連する事項として、現在問題になっているシュノーケリングのマナーの改善を目指した啓発活動を挙げたい。白保では、観光客のシュノーケリングによってサンゴ礁が壊されるといった被害が出ている。白保の民宿では、観光客相手にボートを出すサービスを実施しているが、シュノーケリングについて観光客に教える体制が整わず、サンゴが傷つけられてしまっているのである。サンゴが傷つけられることを防ぐためにも、海との接し方を観光客に広めるためにも、観光客を受け入れる側である地元住民にそうした知識を持ってもらうことが重要だとサンゴ村では考えており、その被害を防ぐための啓発活動をしている。

また、地元住民の生活スタイルも改善しなければいけない問題だと小林氏は話していた(このことについては谷崎氏も指摘していた)。地元住民

の生活雑排水により干潟が汚染されているが、小林氏によると、地元住民は自然があたりまえに身近にあるため、都市住民が持つような自然保護や環境保護の意識は低いという。自然に囲まれた地域であることから、その自然を保護しようという意識・自然に対する畏敬の念といったものが、住民の中に脈々と根付いていそうであるが、実際は世代間の伝達がうまく行かず、そうした意識は世代を越えて伝わってはいない。地域住民も、都市住民と同様に、どちらかという生活の利便性をもとめる傾向にある。

こうした意識の向上については、「今昔展」を開くということを試みているとのことである。

「主役のみなさんに知ってもらおう。地元の人が自分で気付く」という理念のもと、「今昔展」では、サンゴ村スタッフが、次の世代へと引継ぎができていない話(例えば、漁業の技術など)をお年寄りなどから聞き、展示している。

以上のような啓発活動は、ささいなことのようにも思える。しかしながら、サンゴ村スタッフはこのように精神面から海の大切さをわかってもらうことが、白保ひいては島の将来に役立つと考えている。自然保護活動は、対象となる自然の調査・研究だけでない。地道な方法ではあるが、人々の考えを転換することが将来の自然保護につながっていくと考えられるのである。

3-1-3. 子どもへの環境教育

啓発活動について述べた際、世代間の伝達がうまくいっていないことについて触れた。そのような状況の中サンゴ村では、将来を担う白保の子どもたちへの環境教育も行っている。

子どもへの環境教育は、主に2つある。ひとつは、地元の石垣市立白保小学校・白保中学校のカリキュラム・総合的な学習の時間中でのプログラムの実施である。プログラムは子どもたちが自主的に考えるよう工夫されている。疑問を引き出すような学習での経験の積み重ねにより、子どもたちが自然の仕組みを少しずつ知っていき、自然との繋がりを感じてくれるようにというサンゴ村スタッフの意向が反映されている。

もうひとつは、毎年春に一度行われる親子観察会で、対象となるのは、島外の親子数組と白保の子どもたちである。この観察会の大きな目的は、白保の子どもたちと都会の子どもたちとの言わば「異文化交流」を通じて、自分のことを再認識することだそうである。

サンゴ礁の保護と研究のためのサンゴ村が、目に見える効果がすぐには得にくいにも関わらず、このような子どもへの環境教育や前述した啓発活動を精力的に行っている背景には、将来、地域住民の手によって自然が守られていくことを望んでおり、そのために積極的に地域と交流を図っていくことがある。白保の子どもが体験する都会の子どもとの異文化交流と同様に、サンゴ村と地域住民との交流も将来白保の自然に対して何らかのプラス効果を発揮するだろう。

3-2. 石垣島におけるエコツーリズムの現状

現在、石垣島でエコツーリズムに主体的に携わっているのは、エコツアーを主催する旅行業者、ダイビングショップ、そして先にも述べたNGOの3者である。しかし、今までエコツアー業者それぞれが、自らの理念のもとで活動していた中に、昨今、エコツアーブームに乗って新たな業者が参入してきた。海のオーバーユースなど、島の自然のキャパシティを無視した営業を展開する業者の参入により、石垣島のエコツーリズムは新たな局面を迎えつつある。

もともと石垣島でエコツアーを主催していた人は、石垣島の自然にほれ込んで移住してきた人が多いため自然への意識は高い。地元住民との関係を築くのが一苦労という条件にもかかわらず、多くの人に石垣の自然のすばらしさを知ってほしいという考えのもと、利益の上がりにくい中で頑張ってきた人たちである。その人たちが苦心して築いてきたエコツアーの舞台にいわば土足で踏み入るような業者が登場してきたのである。

そうした業者への対策として、今後ルール（ガイドライン）づくりをする予定があるとのことである。そのルールについて、サンゴ村の小林氏は地元で根ざした活動の経験から「地元の人と一緒に

つくる」ことが大切だと語っていた。幸いなことに2004年9月に県が策定し、公表したガイドラインには、地域住民の参画が盛り込まれている。今後も、地域住民の声を十分に反映した取り組みが行われることが期待される。

3-3. 「よそ者」の視点

今回の調査から、サンゴ村の小林氏やエコツアー連絡会の谷崎氏は、現状を把握し少しずつ改善することを目指して行動していることがわかった。これには、彼らは他の地域から移り住んできたのであり、地域住民とは違う価値観を持っていることが大きく関係していると考えられる。環境社会学等において、これら「よそ者」が果たしうる積極的な役割が注目されてきている。鬼頭（1998）の概念整理によると、「よそ者」には、以下の4つの概念が含まれている。

- (1) 当該地域やその地域から地理的に離れたところに暮らしている人
- (2) 外から当該地域に移住してきて、その地域の文化や生活をよく理解していない人
- (3) 当該地域やその地域の文化にかかわると自認する人たちによって「よそ者」のステイグマを与えられるし、また実際に与えられている人
- (4) 利害や理念の点において、当該地域の地域性を越え、普遍性を自認している人

（鬼頭，1998，p. 46）

今回の調査では、小林氏や谷崎氏は、「よそ者」の視点を活かして行動していた。例えば、小林氏は地域住民とかかわりあうことで、地域住民が海とどのように付き合っているかを知り、問題点についての解決策を地域住民に提案している。また、白保の子どもへの環境教育に力を入れている。子どもたちが海の生物と触れ合ったり、海で新しい発見をしたりしている様子を見て少しずつではあるが変化の手ごたえを感じているようだ。このような子どもへの環境教育は、親から感謝されているようで、「よそ者」の視点が地域に受け入れられ、実を結び始めている一つの例だと言える。

また、谷崎氏も小林氏と同じように、地域住民

の生活スタイルの一部に疑問を感じており、自然観察を通して自然について考えてほしいと思い、NGOの活動をしているとのことであった。

小林氏や谷崎氏の例からも分かるように、「よそ者」がその視点を活かすことで、自然環境を地元住民がもつ価値観とは別の価値観で捉え、現状の問題点を浮き彫りにし、改善の糸口を見つけることができるのである。

当たり前すぎて、価値を忘れてしまっていたことに対して、「よそ者」の新鮮な視点が、地元住民（地域住民）による地域の資源の再発見・再評価につながると期待できる。

もちろん、「よそ者」の視点がプラスにばかり働くとも言い切れない。地域全体を長い歴史の中で広く眺めているというわけではないので、勘違いや思いこみ、独自の価値基準により、バランスを逸した評価をしてしまうこともあり得る。その点については、「よそ者」の立場の人間が常に心に留めて、自らの視点が適切かどうか、常に検証していく必要があると言えよう。

ところで、ここまで、「問題点」や「改善」といった言葉を用いてきたが、その中身は実は曖昧である。なぜなら、「よそ者」の視点から見て改善すべきと思われる問題が、果たして地域住民に同じように改善すべき問題だと認識されているか、疑問があるからである。この点について、次節で改めて考えてみたい。

3-4. 地域の環境保全とエコツーリズム

地域の自然環境について、地域住民はどのように認識しているのであろうか。この点に関して、今回の石垣島の調査では直接には明らかにすることができなかった。しかし、新石垣空港建設問題⁷⁾などの状況から考えて、自然環境の保全よりも経済発展を優先せざるを得ない認識の住民が少なくないようである。

そのような状況の中、小林氏や谷崎氏のように自然環境の保全活動を行う人が出てきたということは、このままの状態が続けば、将来石垣島の自然が破壊され人々の生活に支障をきたすことが懸念されることの表れだと見ることもできる。

今回の調査から、「よそ者」であるサンゴ村が、地域社会とのかかわりを積極的に持ち、理解を得ようとすることでお互いが歩み寄っている様子が伺えた。こうした活動を通して、前述した「問題点」の照準が両者の間で重なりあっていき、保護活動の目指す方向性も定まってくるのではないだろうか。裏を返せば、こうした地域への溶け込みがない場合、双方が理解を深め、同じ問題意識を持って行動を起こすことは、大変難しいとも言えるだろう。

したがって、環境保全に関心のある「よそ者」と地域住民が、様々な生活の場面でかかわり合いを持っていくことが、環境保全への第一歩ではないだろうか。この「かかわり」は、1章で述べたエコツーリズムの主体間における共通理解に通じる。なぜなら、「かかわり」は、より多角的に考えを構築するのに役立つと考えるからである。1章で述べたように、「自然」ひとつとっても様々な価値があり、「よそ者」と地域住民の間で意見が食い違うことが予想できるが、この食い違いを前向きに捉えれば、より価値を深めることができることになるだろう。もし、「かかわり」がなかった場合、「よそ者」と地域住民との間で対立がおきかねない。しかしながら、「かかわり」があれば、お互いの意見を交換し、より良い考えが生まれることにつながると考えられる。それはエコツアーの計画・実施といった例はもちろん、「よそ者」と地域住民がそれぞれの郷土料理の作り方を教えあうといった、些細な日常のことでもよいだろう。

1章で述べた共通理解は、かならずしもエコツーリズムのためだけに機能するだけのものではない。なぜなら、エコツーリズムは、地域の環境保全の手段としてはあくまでも選択肢の一つであるからだ。

エコツーリズムの主体間における共通理解は、さまざまな環境問題が議論される中で、個人ができることを実行に移すためのきっかけと捉えればよい。例えばある地域でエコツーリズムを計画し、様々な検討をしていった結果、残念ながら実現に至らなかったとしても、エコツーリズムを検

討したという経験は、必ずや地域で環境保全を進める手がかりとなり得ると考える。

石垣島のように豊かな自然環境と人々の生活が密着している所では、環境への負荷が直接生活環境の悪化を招きかねない。そのため、エコツーリズムの拠り所となる考えを構築することは、石垣島の将来を見据えた環境保全活動の一部を「自然環境への認識を考えるきっかけになる」という形で担うことにつながる。地域における主体間で共通理解が進み、エコツーリズムが環境保全につながる地域づくりに貢献することを期待したい。

終章

本論文では、エコツーリズムとは、地域固有の自然及び地域資源を観光資源とした観光形態であり、地域の経済及び社会に有益であり、さらに、何らかの手立てによって地域資源の保護・保全にも貢献することが期待できるものと考えた。そして、エコツーリズムに関わる主体に注目し、主体間において「自然」について共通理解することが、エコツーリズムが環境保全に貢献する旅行形態となるために必要な条件だと考えた。

そして、エコツーリズムの事例として第4回WWF しらほサンゴ村体験ツアーを取り上げた。サンゴ村は、地域との関係を築き、それをベースにサンゴ礁の調査・研究、啓蒙活動や小中学生対象の総合的な学習の時間・親子観察会での環境教育、「今昔展」の開催、そして地域住民との積極的な交流などの活動をしていた。調査では白保地区において「よそ者」であるサンゴ村と地域住民との「かかわり」によって、地域の自然環境についての共通理解が進んでいたことが見受けられた。この「よそ者」の移入をきっかけにした白保の人々の意識の変化は、環境保全的な地域づくりに繋がっていくであろう。

伊藤(1997)は、「エコツーリズムが自然環境を中心としつつもそこでの人間活動に関わるものであるから地域よりも人間中心のアプローチが重要となる。エコツーリズムは個々の観光客による地域のインパクトを相対的に減少させ地域経

済に貢献する効果は期待できるが、万能の解決策ではない。(中略)故に、ガイドラインなどによる個人の自覚やモラル向上と、入域者数の規制などによるインパクトの抑制という質と量の対策が不可欠である」と述べ、「エコツーリズムの鍵は個々人の環境倫理の認識にもとづく」としている(p.20)。この「質と量の対策」の内の「質の対策」とは、まさに石垣島においての小林氏や谷崎氏を含むNGOによる啓蒙活動が該当するのではないだろうか。「質の対策」の効果は、数値で測ったり目で確認したりすることは難しい。しかし、そうした対策こそ、着実な方法であるように思われた。

石垣島において、エコツアー業者が増え始め、環境への負荷などが懸念され始めているという。このことは、ガイドラインの制定が必要な時が来たことを示すものと言え、実際に調査からほぼ1年後の2004年9月に県がガイドラインの制定・公表をするに至った。今後もこのガイドラインに沿った「石垣島エコツアー連絡会」によるよりよいエコツーリズムを広めていく活動に期待したい。その際「よそ者」からの視点を生かして、方向性を地域ぐるみで考え、相互に共通理解をした上で、地域に根付いた地域のためのエコツーリズムを実現させて欲しいと思う。

今回の調査を通じて、印象に残った言葉がある。それは、谷崎氏の「木を育てるように、エコツーリズムを育てたい」という言葉である。木は、急には大きくなる。大きくなるには、時間がかかる。そうやって「木」が育つように、時間をかけてゆっくりと、急がずエコツーリズムを育てたいということだろう。わたしたちは遠くからではあるが、見守っていきたい。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、取材を御快諾いただき貴重なお話を下さった、沖縄県石垣島のWWF サンゴ礁保護研究センターしらほサンゴ村の小林孝氏と石垣島エコツアー連絡会の谷崎樹生氏に厚く御礼申し上げます。

また、本論文の初期の草稿に対してご意見を下

さった尾見康博氏（山梨大学教育人間科学部）と大島順子氏（琉球大学法文学部観光科学科）に御礼申し上げます。

も、カラ岳の麓にあたる白保地域のサンゴ礁に何らかの悪影響が出ると懸念されており、反対運動が続いている。（加藤，2001）

注釈

- 1) 「石垣島エコツアー連絡会」は、2000年に発足した。会員数は10人で、自然観察指導員・ダイビングインストラクター・ウミンチュウ（漁師）といった人々で構成されている。ちなみに、サンゴ村の小林氏もメンバーの一人である。2003年10月の時点では、具体的な活動はしていないとのことであったが、今後、エコツアーのガイドラインの作成などを予定しているということであった。
- 2) 出発地は、東京だけではない。
- 3) 「村民」とは、しらはサンゴ村の活動を支援している人のことを指し、今回の場合は、ツアー参加者を指す。
- 4) サンゴ村と交流のある自然保護団体を招いて、活動報告を聞く会である。
- 5) 豆腐とは、沖縄の特産品である島豆腐のことである。
- 6) ツアー参加者、サンゴ村・WWF スタッフ、「WWF 自然保護の集い」の参加者、地元の住民が参加した。
- 7) 現在の石垣空港は、1500メートルの滑走路で小型ジェット機を就航させている暫定空港であり、年々増加する空港需要への対応や現空港周辺の航空機騒音の解消、中型ジェット機就航によるコンテナ輸送の実現と積載重量制限等の解消、という諸問題を抱えている。そこで、これら諸問題の解決と八重山圏域のさらなる振興発展を図るため、中型ジェット機が就航可能な2000メートル滑走路を有するジェット化空港の建設が予定された。しかし当初、新石垣島空港建設予定地に、世界でも有数のアオサンゴの大群落がある白保海域が含まれていたことから反対運動がおこり、現在の予定地としてはカラ岳が提案されている。しかし、カラ岳に空港が建設された場合で

引用文献

- 石森秀三，2002，「21世紀は『自律的観光の時代』」『科学』71：706-713。
- 伊藤太一，1997，「エコツーリズムのジレンマ」『森林科学』21：16-22。
- エコツーリズム推進協議会編，1999，「Entering the Ecotourism Age エコツーリズムの世紀へ」エコツーリズム推進協議会（現 NPO 法人日本エコツーリズム協会）
- 太田好信，1996，「エコロジー意識の観光人類学 ベリーズのエコ・ツーリズムを中心に」石森秀三編『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容 3 観光の二〇世紀』207-222。ドメス出版
- 沖縄県，2004，「沖縄県エコツーリズムガイドライン2004」<http://www3.pref.okinawa.jp/site/view/contview.jsp?cateid=232&id=8072&page=1>
- 加藤さやか，2001，「石垣島の珊瑚礁に関する研究—新石垣空港と珊瑚礁」大妻女子大学社会情報学部卒業研究
- カロリン，フランク，2002，「エコツーリズムは持続可能なのか」『地理科学』57-3：4-5。
- 菊池直樹，1999，「エコ・ツーリズムの分析視角に向けて—エコ・ツーリズムにおける『地域住民』と『自然』の検討を通して—」『環境社会学研究』5：136-151。
- 鬼頭秀一，1998，「環境運動／環境理念研究における『よそ者』論の射程—諫早湾と奄美自然の権利訴訟の事例を中心に」『環境社会学研究』4：44-59。
- 小林孝，1998，「準備室の三年間」『MONTHLY MAGAZINE WWF』255：5-6。
- 敷田麻実・森重昌之，2001，「観光の一形態としてのエコツーリズムとその特性」『国立民族学

- 博物館調査報告』23：83-100.
- 島川崇, 2002, 「観光につける薬—サステイナブル・ツーリズム理論—」：1-183. (株)同友館
- 真板昭夫, 2001, 「エコツーリズムの定義と概念形成にかかわる史的考察」『国立民族学博物館調査報告』23：15-39.
- 瀬田信哉, 1995, 「エコ・ツーリズムの向こう側」『産業と環境』24(3)：47-51.
- (財)日本自然保護協会, 1994, 「NACS-J エコツーリズム・ガイドライン」
- ※この文献については、本を直接参照できなかったため、ウェブサイト (http://www.nacsj.or.jp/old_database/ecotourism/ecotourism-940801-1.html) から引用した。
- (社)日本旅行業協会, エコツアーとは? <http://www.jata-net.or.jp/osusume/eco/5.htm>
- Boo, Elizabeth, 1991, "Planning for Ecotourism," PARKS, 2-3=1992, 薄木三生仮訳「エコ・ツーリズム計画」『国立公園』501：2-7
- 山極寿一, 2003, 「ゴリラのエコ・ツーリズム」古川彰・松田素二編『観光と環境の社会学』(株)新曜社
- 吉田正人, 1999, 「エコツーリズムは自然保護の手段となりうるか」『野生生物保護』4-1：1-15.
- WTO and UNEP, 2001, 「International Year of Ecotourism 2002 leaflet」http://www.unep-tie.org/pc/tourism/documents/ecotourism/iye_leaflet_text.pdf

The Role of Ecotourism on the Conservation of Local Environments

ASUKA ICHIDA^{* **}, KOZI HAYASI^{***} and NATSUMI HOSOYA^{*}

**School of Social Information Studies, Otsuma Women's University*

***Present Affiliation : Isetan Co. Ltd.*

****Natural History Museum and Institute, Chiba*

Abstract

We discussed the role of ecotourism on the conservation of local environments.

Ecotourism is defined as a tour which depends on the characteristic nature of a region, is useful for local economics and/or society, and contributes to the conservation of local resources. We focused on the subjects which are concerned with ecotourism. We concluded that a common understanding for nature among subjects is necessary for the contribution of ecotourism on the conservation of local environment.

This is also supported by the analysis of the tour at Shiraho-sango-mura considered as a case of ecotourism. The common understanding for the natural environment between a staff of Sango-mura (Yosomono = a stranger) and local citizens is indicated as an important factor.

Key Words (キーワード)

Ecotourism (エコツーリズム), Ecotour (エコツアー), Conservation of Local Environments (地域環境保全)